

## 朝来市の医療を考えるフォーラム

7月31日、和田山ジュピターホールで「朝来市の医療を考える」フォーラムが開かれました。

これは、市を取り巻く医療の現状について学ぶことを目的に開催されたもので、約700人の市民や関係者が出席しました。特別講演では、但馬救命救急センター長の小林誠人氏が「医師が救急現場に向く意義」と題して、医師がヘリコプターに乗って現場に急行する『ドクターヘリ』の効果や必要性などを説明。続いて行われた基調報告では、医師と住民の代表者が、

それぞれの立場から現状や今後の課題などを発言しました。参加者は身近で重要な医療の問題に熱心に聞き入っていました。



特別講演を熱心に聞く参加者

## 古代あさご館が入館者15万人を達成

平成18年に開館した、朝来市埋蔵文化財センター「古代あさご館」が7月25日、入館者15万人を達成しました。

15万人目の入館者となったのは、京丹後市から訪れた寺田和男さん・美由紀さんご夫妻。多次市長から花束と記念品が贈られました。

寺田さんは「竹田城跡に行く途中に立ち寄りました。古代あさご館には初めて来ましたが、こんな機会にいられてラッキーで光栄です。」と感想を話されていました。



多次市長から花束を受け取る寺田さんご夫妻



①土田城 ②観音山城

の周りにも多くの堅堀群があり、防御機能を充実させています。ただ、土田城の縄張りはいずれだけではありません。主要部の南側(和田山トンネルの上)と北側には、ひとつの長さが約10メートル程度の小さな曲輪群と小さな堀切がたくさん配置され、狭い尾根上群として延々と築かれています。そしてその延長は約1キロに及びます。その姿は当時南朝方の中心勢力であった楠氏の城塞群である千早赤坂城塞群にも似ています。文献によれば、南北朝期にはこの城に土田太郎左衛門尉が在城し、延元元年(1356)には北朝方の攻撃を受けています。延々と続く小曲輪群と小堀切はこのころの遺構なのでしょう。この土田城は最初、南北朝期の大城塞群として出発したのです。

その後、主要部とその周辺だけは、堅堀群の存在などから戦国末期に改修されています。ところがこの土田城では南北朝と戦国末期の間の時代、室町から戦国初期の遺構は見ることができません。この、いわば空白期を埋める城郭が観音山城なのです。

観音山城は山頂部に存在する延長約13メートルの主要部から、三方向に延びる尾根に約10メートル程度の曲輪群と堀切を作っています。一つ一つの曲輪が大きくしつかりと作られていることが特徴で、土田城の空白期間を埋めるような時期(室町〜戦国初期)に築城されたものと考えられます。

土田城と観音山城は立地的な面から見て共に土田氏の城郭だと考えられます。土田氏は、南北朝期に築城した土田城を室町期に観音山城に移し、さらに戦国末期には土田城の主郭周辺だけを改修してコンパクトな戦国期城郭を築城しているのです。

(市教育委員会社会教育課)  
※曲輪：兵隊を駐在させておく平坦地